

陳舜臣

含笑花

の木

二玄社

陳舜臣

二玄社

含笑花の木

含笑の花がんしよのか

一九八九年一〇月三十一日 第一刷印刷

一九八九年十一月一日 第一刷発行

著者 陳舜臣

発行者 渡邊隆男

発行所 株式会社 二玄社

東京都千代田区神田神保町二丁目二番
電〇三(二六三)六〇五一(三番)
郵101 振替 東京 四一二八七八二

印刷 株式会社 平河工業社

製本 牧製本印刷株式会社

©1989 陳舜臣 Printed in Japan

ISBN4-544-03027-7 30270

含笑花の木

目次

I

千変万化のくに 11

歴史のみこむ母なる流れ 35

黄帝陵を訪ねて 45

泰山のこと 50

黄山の興 56

*

シルクロードの魅力 65

西域との再会 70

キジル千仏洞 87

西域南道 95

ふしぎな糸のつながり

イスタンブールでおもったこと

105

II

答礼宴にて

111

茅盾さんのこと

119

巴金氏と会う

123

「家」の公演によせて

129

涙多き取材旅行

136

*

苦渋にしたり落ちる汗 —— 竹内好『日本と中国のあいだ』 ——

143

武田泰淳、竹内好、増田渉の三氏を悼む

154

井上さんと歴史小説

158

司馬曼陀羅

165

III

神戸の魅力 169

『青雲の軸』 雑談 184

ヘディンと『シルクロード』 — 青春の一冊 —

二足の草鞋 — 処女作のころ — 195

海をながめて 200

私の海と空 206

走ること 210

百万ドルの夜景 216

含笑花の木 220

紳士の時代の終焉 223

名人の話と前置き 227

*

国際化された料理 234

茶館復活 241

屠蘇 247

*

声と活字と 251

会議 255

女性進出の起伏 258

天知る、地知る 263

私の宰相論 267

政治は倫理の「技術」

旧暦の効用 275

「平成」雑感 279

271

IV

『中国 風土と文明』 日本語版によせて 285

陸文夫 『美食家』 日本語版によせて 292

蔡子民 『唐詩旅情』 によせて 301

道教雑感 — ジョン・プロフェルド 『道教の神秘と魔術』 — 307

稲畑耕一郎 『一勺の水』 書評 321

李順然 『わたしの北京風物誌』 によせて 324

小槻晴明 『魅せられてインド』 によせて 328

*

あとがき 332



含笑花（がんしょうか）

——熱帯の原産なので、日本ではそれほど多くない。正式には「カラタネオガタマノキ」というらしい。クリーム色の花は、高い香りを放つ。台湾では女性が髪に挿したりして、香水がわりに使っていた。茶葉のなかにいれて、においをしみこませるのにも使うので、そのために栽培もしていた。……

（p.220 「含笑花の木」）

装
幀

山
崎
登

I

千変万化のくに

「南船北馬」ということばがある。

中国の南部は水路が多い。自然の河川、人工の水路などが、場所によつては毛細血管のようにひろがっている。長江（揚子江）や珠江の水系はよく知られているが、浙江の錢塘江、福建の閩江なども、かなりの大河である。

車に乗つて外の景色をみていると、とつぜん、水田のうえを大きな帆がすべつて行くのにであひ、びつくりすることがある。もちろん、舟が水田のうえを通るのではない。水田のむこうに水路があり、舟はそこを悠々とすべっているのだ。こんなふうに、ひと目ではわからない、かくれた水路がきわめて多い。

福建の山間地方を、一日がかりで車で走ったことがある。車は川ぞいの道路を走っている。

ずっとおなじ川のそばを走っているのかとおもったら、案内の人が、この川はさつきとはちがう川だといって、その名を教えてください。おなじ川が名前を変えることはよくある。前出の浙江省の錢塘江も、杭州湾にそそぐ部分の川の名であり、その直前までは富春江と呼ばれる。その上流は桐江であり、そこに新安江や蘭江が合流するのだ。蘭江の上流は衢江であり、さらにその上流も名前がちがう。だから、錢塘江水系と呼ぶよりほかないだろう。だが、福建で私がおなじ川だとおもっていたのは、呼び名がちがうだけではなく、水系も異なる川であつたのだ。気がつかないうちに、道路のそばの川がいかわつてしまう。それほど水路が多い。

橋をかけることが、いまほど容易でなかつた時代は、船を操つて水路で行くほうが、よほどつとり早かつたのである。だから、中国の南方の人たちにとって、交通の最も重要な手段は船であつた。

それにくらべて、中国の北方は、黄河という大きな河がありながら、流れが急なことで、冬季に結氷する地域が多いことなどで、船の交通に役立つことが少ないばかりか、かえつて阻害することになっている。ただし結氷期は、氷上をすべつて行けるという、別の利便さがある。

長江はかなり上流まで、一万トン級の船が航行でき、小さな水路にいたるまで、ジャンクの帆でにぎわっている。それにくらべて、黄河では船のすがたを見かけるのは、きわめて寥々たるものなのだ。北方では、地平線まで麦畑がつづいていたり、草原がひろがっていたり、砂漠

のにおいの濃厚な土地が多い。クルマ時代以前は、この地のおもな交通の手段は、馬だったのである。このような状況を、「南船北馬」と表現したのだ。

もっともこの「南船北馬」は、南に行けば船であちこちをまわり、北に行けば馬とびまわる、という「東奔西走」とおなじ意味に用いられることもある。それにしても、南北のおもな交通の手段が、船と馬とであることにかわりはない。

アヘン戦争直前の道光十八年（一八三八）、湖北省武昌にあった湖広総督林則徐が、アヘン問題対策について、皇帝の下問に答えるために上京したことがある。道光帝は林則徐の人柄とその意見に感心し、「紫禁城賜騎」の特典を与えた。北京の皇居である紫禁城内では、臣下は騎馬を許されない。それをとくべつに許したのである。十一月十四日、林則徐は騎馬で参内した。彼の日記には、その日、彼は皇帝から、

——你^{なんじ}は乗馬に慣れず。椅子轎に坐る可し。

という諭（皇帝のことば）を蒙^{こう}つて、謹^{こん}んで叩頭^{こうとう}して謝した、とある。

馬にのって参内する林則徐のすがたを、皇帝は殿廊で見ていたのであろう。いかにも危なっかしい騎り方なので、明日からは八人の轎夫^{きやうふう}がかつぐ轎^かのうえに椅子を据え、そこに坐つて参内せよ、と命じられたのだ。林則徐は科擧に及第した文官であり、出身は福建である。すなわち、彼は南方人であり、「南船北馬」ということばでもわかるように、馬はあまり得意ではなか

つたのだ。

ところが、「南船北馬」という表現は、古典といわれるような文献にはみえない。民間に、いつのまにか定着した成語であり、誰もがそれをとうぜんと考えて用いてきたのだ。古典に似た表現をさがすと、紀元前二世紀の『淮南子』という書物に、

——胡人は馬に便にして、越人は船に便なり。

ということばがみえる。胡人とは一般に外国人を指すが、『淮南子』が書かれた前漢初期は、もっぱら匈奴に用いた。『史記』も、匈奴のことを胡と呼んでいる。唐代あたりになると、胡ということばは、しだいに西域の異族という意味が強くなった。塞外の匈奴にせよ、西方のシルクロードの民にせよ、中国ぜんたいからみれば、胡は北方に属するのである。その胡は馬を利用するのがたくみであるというのだ。

北方の異族を胡とするのにたいして、南方のそれは呉、越または蛮と呼ばれる。春秋末期に、呉と越とが対立したが、呉は江蘇、越は現在の浙江を根拠とした。名臣范蠡によつて富国強兵をはかり、宿敵である呉をたおして、父祖の雪辱をとげた越王勾践の名は史上にかがやいている。

『史記』によれば、越王勾践の先祖は、夏王朝の創始者である禹の末裔で、会稽（浙江）に封ぜられ、